

「被災地での祈り②」

4月初旬、宮城県の被災地を訪問中、いろいろなことが頭に浮かびました。特に、住民を守るため命がけの活躍をし、殉職された公務員の皆様を思うと、つらい気持ちにさせられます。彼らには、無事の帰宅を待つ家族があったのです。

人間、一人一人の立場に立てば、人の生命も人生も、大きな重みや意味を持つと実感させられます。しかし一方、こうした大災害に直面すると、個々の人間の存在はいかに小さく、またはかなき人生と思われ知らされます。

それでも、そのささやかな人生に、何かしらの意義を見出し、出そうとするなら、いかに社会のために貢献できたか、いかに多くの人のために役に立てたか。そのことが、一人の人間の真の評価となるのではないかと、私はそう考えました。

「人事は棺(ひつぎ)を蓋(おおい)て定まる」ということばがあります。人生の真の価値は、棺の蓋を閉める、その瞬間に決定されるという意味です。

この地域にも、東海地震などの災害は必ずやって来るといわれています。今回は震災の直撃を免れた私たちですが、いざというその時、一人の人間としていかに身を処すべきか。気まぐれな自然の猛威は、私たちに厳しい覚悟を迫っていると感じられます。また社会のあるべき形についても、深い自省が求められましょう。

自然災害に遭遇しがちな日本には、人間はあの世とこの世を往来し、生まれ変わりを繰り返すという、独特な「あの世観」があるといわれます。

今回の震災で犠牲となられた皆様が、次にこの世に戻られる時、よき世の中に生まれたいと喜んでくださるような、そんな社会の復興を成し遂げることが、今を生きる私たちの使命ではないかと思えました。

安城市長

神谷 学



市の備蓄品と、個人・企業などから受け付けた支援物資の発送



安城市職員のボランティア活動(岩手県大船渡市)



衣浦東部広域連合消防局の活動(宮城県亘理町)



中学生も支援物資の仕分けを手伝い

東日本大震災
〜支援は続く

その他の支援

- 安城更生病院DMAT(災害派遣医療チーム)と医療救護班が活動
- 被災者向けに、市営住宅を提供
- 応急給水班(水道給水車)活動
- 災害ボランティアセンター運営を支援
- り災証明事務活動
- 避難所保健活動を支援
- 義援金を送金
- 募金活動
- 再生家具などを、被災地から市内へ移住した人へ提供